

# 教養プロジェクトⅢ「美人画」

北海道大学経済学部経済学科 3年

豊島由里子

今回の教養プロジェクトでは「美人画」を取り上げる。「美人画」は日本史の教科書で暗記するものとして捉えていない人は多いだろう。西洋美術などに比べたら、日本人でありながらも日本画について熱く語る人は少ないように思う。それは日本画の鑑賞の仕方がなかなか分からないからではないだろうか。私は日本画と西洋画の最も違う点は、前者が色や形を“引いていく”画であるのに対し、後者は、色や線を“足していく”ものであるという点でるように思う。色や線が極限までに削られた日本画には“必要最小限の美”がある。例えば、江戸時代の美人画で描かれている女性の表情は皆“切れ長の眼・おちょぼ口”の様式をとっており、背景もシンプルなものが多い。しかしこのシンプルさが画を観ている者に様々なことを想像させる余白を生み出している。この点が日本画の最も魅力的な点であるように思う。美人画は日本画の中でも、より画を観ているものに多くの想像をもたらしやすいジャンルである。今回のレポートでは、各作品の背景や情報よりも私個人が画から感じた感想及び“想像したこと”を中心に述べる形にする。

## 1. 菱川師宣(1618～1694) 『見返り美人図』

菱川師宣の代表作であり最も有名な美人画といえ、この『見返り美人図』であろう。“見返り美人図”という名前がつく作品は色々あるが、菱川の『見返り美人図』には顔が完全に振り向いておらず、顔の右半面しか見えていない点に特徴がある。そして、この女性の体勢はよく見ると不自然極まりないものである。一目見ただけでは気がつきにくい点ではあるが、この不自然さがこの作品に目を留ませる一因となっているのかもしれない。

## 2. 鈴木春信(1725～1770) 『雪見相合傘』

この作品については背景に注目したいと思う。雪が降っているという情景であるが、この降る雪の表現が素晴らしい。積もった雪は真っ白でとてもシンプルに描かれているが、空気中に漂う雪はとても繊細に描かれている。この背景の繊細さとシンプルさにより、手前の人物二人が浮き上がるように見える。静かで周りには雪しかないところで二人きり、という情景がありありと想像できる。

### 3.勝川春章(1726~1793) [『美人鑑賞図』](#)

今回取り上げる作品の中で、最も華やかで最も登場人物が多い作品である。この作品の中の女性は3つのグループに分かれて、掛け軸を外し、立ち話をしている。彼女たち一人一人の視線から様々なことが想像できるが、私がこの作品で最も魅力的に感じるのは庭の表現である。庭は女性たちの背景となるが、屋敷内とは全く異なる画風である。画の中にもう一つの画が存在するように感じられる。前述の『雪見相合傘』もそうであったが、この時代の美人画は背景との対比で人物が浮き上がるようにみえる作品が多いように思う。

### 4.喜多川歌麿(1753?~1806) [『ポッピンを吹く女』](#)

こちらも菱川師宣の『見返り美人図』と同様、美人画の中では特に有名な作品である。この作品の魅力的な部分は色鮮やかな着物の市松模様である。町娘の愛らしさと清廉さが表現されている作品である。

### 5.歌川国貞(1786~1865) [『星の霜当世風俗 \(蚊焼き\)』](#)

この作品では、蚊帳の中に紛れ込んだ蚊を女性が燃やして退治しようとしている様子が描かれている。蚊帳の外の景色は後述の『夜桜美人図』(葛飾応為)の表現する夜とは大きく異なり、とても不気味な雰囲気醸し出している。その不気味さが作品全体を覆っている。また、蚊帳の中にある男性の浮世絵が描かれている団扇の存在もなんとも意味深である。

### 6.葛飾北斎(1760~1849) [『美人愛猫図』](#)

『富嶽三十六景』で有名な葛飾北斎も美人画を残している。それがこの『美人愛猫図』である。この画では猫を胸元に抱えた女性が描かれている。この猫の表情がなんとも恐ろしい。我々が普段目にしている猫とはかけ離れている表情をしている。猫はこのような表情をすることがあるのだろうか。猫を抱えている女性の表情は、寂しいような、悲しいような、何かを諦めたような表情をしている。彼女の表に出さない胸の内に溜めこんだ思いを、猫が代弁しているのだろうか。

### 7.葛飾応為 [『夜桜美人図』](#)

葛飾応為は葛飾北斎の三女であり、応為という画号は北斎が応為のことを「おーい、おーい」と呼んでいたことに由来するという説がある。北斎の助手をつとめながら自らも作品を残し、北斎に「美人画にかけては応為には敵わない。」とまで言わしめたとされる。北斎の没後、応為は消息不明となった。

応為は“江戸時代のレンブラント”と称されるほど、光の表現が巧みである。『夜桜美人図』でも、行灯の光の下で俳句をたしなめる女性が描かれている。この女性のモデルは、若くして才能を見出された女性俳人であると言われている。この作品で最も特徴的な

点は星空の描写である。星は等級によって輝く色が異なるが、それをしっかりと描写している。今ではもう東京では等級が見分けられるほどきれいな星空はみえない。江戸時代はこんなにもきれいな星空があったのだろうか。そして行灯の光に照らされた女性の顔は才能があふれる様にもみえるし、寂しそうな表情にもみえる。応為は彼女に自分を投影したのだろうか。

#### 8.上村松園(1875~1949) [『つれづれ』](#)

上村松園は生涯を通して女性の眼から美人画を描き続けた画家である。気品あふれる格調高い女性像を描き続けた。『つれづれ』も上村松園の美しい世界観が描かれている。女性の着物自体には、例えば前述の『美人鑑賞図』(勝川春章)のような華やかさはなく、淡い落ち着いた色合いである。しかし、画全体としてみると女性の優美さが全面に出ている。江戸時代は時代の変化によって様々な作風の美人画が生まれたが、上村松園の美人画には時代の変化に流されない、「これが女性の美である」というような強い主張が感じられる。

#### 9.池永康晟(1965~) [『睨める・穂波』](#)

現代の美人画家として外せないのは池永康成である。彼の描く女性は、“切れ長の目、おちょぼ口”の女性ではなく、前述した作品らに比べたら写実的な要素が多い。『睨める・穂波』は、特に画を観ている者に何かを訴えかけてくるような強い眼が印象的である。彼の作品の本格的な発表は2005年からと遅く、その理由は「自分の色を見つけるために、十数年色見本を作り続けた為」と説明している。その十数年探した色は、とても麻布に岩絵の具で描いているようには見えない滑らかさと艶っぽさを生み出している。また、彼は女性の服や背景で花柄を用いることが多いが、この可憐な女性らしい花というモチーフとは対照的に、モデルとなっている女性には力強い意志のようなものが感じられる。この女性の力強さ、たくましさを前面に出しているところに現代美人画の特徴があるように思う。しかし女性の力強さだけではなく、儂さも同時に感じられ、その儂さが画を観ている者の心を揺さぶる一因となっているのではないだろうか。

池永康成は後述の阿部清子らと共に「指派(ゆびのは)」という展覧会を開催している。「指派」の由来は、彼曰く「目の前の愛する人を残せるのは、私の指だけ。」<sup>ii</sup>という考えによるものである。とても彼らしい魅力的な名前である。

#### 10.阿部清子(1970~) [『手負いの蕾』](#)

阿部清子の描く女性は、混ざり気のない、女性に対する希望や幻想を含まない、「本当の女性」であるように思う。女性が描く美人画では、前述の上村松園の作品とは真逆の作風のように感じられる。きれいな服を着なくても、いわゆる“女性らしさ”を兼ね備えていなくても、女性は女性である。彼女の作品には、様々な思いを胸に秘めながら生きてい

かなければならない女性達が繊細に描かれている。

---

i 『月刊美術 418 号』(2010)、実業之新報

ii “湯上り美術談義”、<[agariart.com/yubinoha/01.html](http://agariart.com/yubinoha/01.html)>、2016 年 2 月 9 日アクセス